

親しみを表す呼びかけ:ダーリンはただの友達?!

Terms of Endearment

海外旅行をしたことのある人なら、体験したことがあるはず。現地人とコミュニケーションを楽しもうと、単語帳を脇に携え、何度も役立つ表現を練習し、現地に着くやいなや、今まで聞いたこともない方言に出会い、途方にくれてしまった、などということはよくある話です。地元の人と言葉を交わすのは旅のとおきの楽しみの一つ。でもイギリスにはとにかく沢山のアクセントやその土地固有の言葉があるので、挨拶の言葉だけでも混乱しそう。そんなイギリスで使われている「親しい人を呼びかけるときに使う言葉」についてご紹介します。

スコットランドのグラスゴーでは、男友達同士は、相手の身長や体重から、'big man' (大男) または 'wee man' (小さい男) と呼び合います。女性には 'Hen' (雌鳥) と親しみを込めて呼びます。エディンバラでは、友人に対しては 'gadgie' (やつ) と呼びかけけることもあります。

北イングランド特有の方言、Geordies が誕生したニューカッスルでは、'bonny lad' (かわいいやつ、子) や 'kiddie' (おちゃめなやつ、ひと) という言葉は好意を表す呼びかけの言葉です。女性には 'pet' (お気に入り) という呼びかけの言葉があります。

アイルランドからの移民の流入によって、'Scouse' と呼ばれる特有の方言と英国でも最も強いアクセントを持つようになったリバプールでは、'lad' (男の子) が短くなった 'la' という呼びかけがあります。

北アイルランドでは、友達になると、アイルランドの非定住民族に由来し、少年を意味する言葉 'sham' と呼びかけられるでしょう。ウェールズでも、男性同士では少年という意味の 'boyo' や 'butt' という言葉がよく使われます。ただ、この 'butt' という言葉は標準の英語では、お尻という意味を持つので、気を付けたいところ。

地域の方言や人々が 'Brummies' と呼ばれるバーミンガムでは、友人を 'mucker' と呼びます。なまりの強いバーミンガムアクセントは英国で最も人気がないことで有名ですが、最近の調査からは、多くの英国人が、バーミンガムが位置するミッドランド地方アクセントで話すことが愚かなイメージを与えていることが明らかに。シェークスピアも使っていたアクセントと言われるだけに、なんとも皮肉ですね。一方で、アイルランドのアクセントは英国中でも人気抜群で、テレフォンセールスの仕事でとてもプラスになるよう。

ロンドンでは、イーストエンドの強い方言 'cockney' (コックニー) が、ロンドン周辺地域の方言と合体して 'Estuary English' (入江の近くで使われる方言) として知られる新しい混成語ができました。ロンドン子にとっての親しみのこもった呼びかけの言葉は、'darling' (ダーリン) や 'love' (愛しい人) 'mate' (仲間) が日常的で、お店の店員が客に対しても日常的に使われます。

かつては地方の強いアクセントで話す人たちは英国社会では見下されていましたが、興味深いことに、最近では逆の傾向が強まっています。英国放送協会 (BBC) もかつては、'RP (Received pronunciation)' (容認発音) として知られている標準英語を話せるアナウンサーだけを雇っていた時期もあったようですが、今では地域のアクセントを使うアナウンサーはごく一般的になり、英国の4地域ごと (イギリス、スコットランド、ウェールズ、北アイルランド) の方言やアクセントを使用したテレビドラマは大変人気があります。

方言やアクセントの様々な話題は英国放送協会 (BBC) のサイト (<http://www.bbc.co.uk/voices/>) に満載です。

かつてはタブー視されていた方言も、今では、ステータスシンボルになり、the 'Mockney' という 'cockney' を真似た新たな方言や、イーストエンドロンドンの方言やアクセントを使うことで人気を集めようとするセレブを生み出しています。トニー・ブレア (元英国首相) やデーモン・アルバーン (ミュージシャン)、ジェイミー・オリヴァー (シェフ) は 'Mocknies' とされています。

著作者 フィリップ・パトリック (Philip Patrick) は、ブリティッシュ・カウンシル (www.britishcouncil.or.jp) の英語講師です。